

Q A<sup>3</sup> Kyushu University  
R C Advanced Asian Archaeological Research Center  
NEWSLETTER No. 13  
2017. August  
九州大学アジア埋蔵文化財研究センター ニュースレター



中山平次郎の元寇防塁位置研究と  
九州大学キャンパス

発掘調査社会連携部門  
総合研究博物館 岩永省三

1912(大正元)年、中山平次郎が九州帝国大学の医科大学・工科大学構内で元寇防塁らしき高まりを最初に発見した。中山は当時断続的に残っていた高まりの踏査で確認ないし推定した防塁の位置を「医科大学の裏境」-「箱崎網屋の墓地」-「工科大学構内」-「地藏松原墓地」と記述した。1920(大正9)年、九州帝国大学農科大学(大正8年創設)の東側・地藏松原で元寇防塁が発掘され、1931(昭和9)年に国史跡に指定された。地藏松原の指定地から南南西方向に延長した九大農学部・旧工学部構内、さらに医学部構内に至る区間に元寇防塁が存在したことは間違いないが、その厳密な位置は、九州帝国大学・九州大学の各種建物・施設の建設や、学外市街地の開発に伴う削平によって地上の痕跡がすべて失われてしまったことから、全く不明となっていた。

特に九大箱崎地区では、中央図書館(1972年竣工)の建設時に石列が発見されたものの、何らの記録も残されずに破壊されたため、位置が不明であった。近年、福岡市埋蔵文化財課は、地藏松原指定地、農学部1号館中央、中央図書館西半、情報基盤センター、旧工学部4号館、博物館第1分館を結ぶラインを防塁位置と推定し、九州大学が箱崎地区の売却・移転計画を明らかにして以来、2014~15年にかけて、元寇防塁の探索のために、この推定ライン上およびその南側で数か所のトレンチ調査を行ってきたが、防塁の発見には至らなかった。



写真1. 奥の松が生えた高まりは中山先生が注目した地点そのものに当たる

そのため、箱崎キャンパス内では、元寇防塁がすでに削平され消滅した可能性もささやかれていた。ところが2016年8~9月に、九州大学埋蔵文化財調査室の調査によって、地藏松原防塁の南西約300mの中央図書館南側地点で、福岡市文化財課による推定位置より若干陸側において、石積み遺構の下半が良好な状態で発見された。2017年には、その北側・南側で延長部が確認されるに至った。2016・2017年の発掘調査によって発見された石積み遺構の検出位置が、福岡市埋蔵文化財課による推定線から東にずれ、方位の振れも異なることから、あらためて九大箱崎地区内およびそれ以南での防塁線の位置を検討する必要が生じてきた。

今回、中山平次郎が調査した頃の九州帝国大学キャンパスの姿と近年の状況との対応関係を詳細に検討した結果、中山が医科大学内・工科大学内・農科大学内で実見して元寇防塁とみなした遺構の位置を特定することが可能となり、2016・2017年検出の石積み遺構は「中山ライン」に乗っている事が判明した。そもそも中山の推定は未検証仮説であり、発掘調査による検証が必要であったのであるから、その一端を九大埋蔵文化財調査室による調査が実行したと言えるし、今後さらにそれが継続されねばならない。何はともあれ、中山が推定した「防塁」が、その後の大学の造成で壊滅していたのではなかったことが確認できたのは誠に幸いであった。本研究の成果は、『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—』に掲載予定である。



写真2. 理学部中庭地点の石積み。もう少し先で右にカーブして行くはずである



縄文時代早期に大隅半島南端から約40kmの海底で起こった鬼界アカホヤ (K-Ah) 噴火では、九州本土南部まで達した大規模な火砕流が発生し、上空高く舞上がった細粒火山灰は東北地方まで及んだ(宇井、1973; 町田・新井、1978)。この噴火が当時の地形や植生などの自然環境へ与えた影響については、自然科学分野の調査研究の進展で、さまざまなアプローチがなされている(森脇ほか、1994; 成尾、1999; 杉山、2002; 松下、2002)。

発表者はこれまで、鬼界アカホヤテフラ (K-Ah) の年代に関する研究をレビューしつつ、同テフラの考古編年上での位置付けについても検討を進め(柴畑、2013)、K-Ah噴火が人類をはじめとする生態系にどのような影響を与えたのか考察してきた(柴畑、2002、2016)。

九州東南部の宮崎平野では、鬼界カルデラテフラの降下火山灰層が、陸上堆積では厚さ20~30cmの赤橙色の中~細粒砂サイズのガラス質風化火山灰として観察される。対して沖積層中の水中堆積物は、再堆積部を含み、厚さ2m以下の灰色の中粒砂サイズのガラス質火山灰からなるとされる(長岡ほか、1991)。この鬼界アカホヤテフラ主体の堆積物については、テフラ降灰によって陸上植生が枯死し、貯水機能を失った山地・丘陵斜面の崩壊に伴う土石流によってもたらされたものであるという推定もされてきた(長岡ほか、1991)が、近年、1996年の宮崎市佐土原町黒田の石崎川河川改修工事の際に剥ぎ取りされた、貝化石や鬼界アカホヤテフラを伴う地層断面試料の堆積環境を検討したところ、鬼界アカ

ホヤテフラ層が同テフラ降灰直後の津波イベント堆積物であるという評価も示されている(市原ほか、2015; Matsuda et al., 2016)。

いずれにしても、当時、海が進入してできた内湾の浅海域が鬼界アカホヤ噴火のイベントによって急激に埋積されて堆積環境が激変したことは確実である。

平成29年7月、宮崎県宮崎市大字跡江の生目の杜運動公園内において、宮崎平野沖積地の鬼界アカホヤテフラ前後の堆積環境復元のため、学術ボーリングを実施した。乱れの少ないコアを得るために固定ピストン式シンウォールサンプラーで採取したが、一部硬さが中位以上の粘性土があったため、部分的にロータリー式二重管サンプラーを導入して作業を進めた。結果、現地表面からマイナス15.55mまで掘り下げることができ、現代の地盤改良に伴う盛土約6.5mを除いて、その下位約9mのコアを採取することに成功した。コアの簡易柱状図を示すと、盛土下に約1.4mが黒褐色の有機質土(層厚約1.4m)、その下に鬼界アカホヤテフラとみられる堆積物(層厚約1.7m)、それ以下は暗灰色の粘性土が約5.5m続き、最下層では、有機質と貝殻片を混入している。

今後は、円柱状のコアを半裁して、観察、写真撮影、断面図作成を行ったのち、分層した各層を対象として、花粉分析・珪藻分析・<sup>14</sup>C年代測定を行い、鬼界アカホヤテフラ前後の堆積環境の変遷を復元する。さらに、鬼界アカホヤテフラ下位の有機質と貝殻片の同定も進めていき、あらゆる角度からこのコアの分析を進めていきたい。



写真1. ボーリング地点近影



写真2. コア-下半分を半裁したもの

【センター活動報告】

2017年7月18日

第12回アジア埋蔵文化財研究センター 研究会

講演題目:「中山平次郎の元寇防塁位置研究と

九州大学キャンパス」

発表者:岩永省三(総合研究博物館)

九州大学アジア埋蔵文化財研究センター  
ニュースレター No. 13

発行:〒819-0395 福岡市西区元岡744

九州大学アジア埋蔵文化財研究センター

編集:仙田 量子

発行日:2017年8月31日

TEL:092-802-5663/FAX:092-802-5662

E-mail:qa3rc@scs.kyushu-u.ac.jp

ホームページ <http://scs.kyushu-u.ac.jp/qa3rc/>